 ©2012 筑波大学生物学類

特集：卒業生便り

化学品メーカーの営業となって 15 年

浅利　桂（筑波大学 生物学類 1997 年 3 月卒業）

こんにちは。1997 年の卒業生の浅利と申します。
当初この話を受けるのにはとても迷いました。というのも、私は学生時代はとても褒められた学生ではなく、どちらかと言えば「落ちこぼれ」の部類に入る学生だったからです。
なぜ落ちこぼれたか、、話は簡単です。大学に入ってからというもの、やってみたかった事が山積みで、勉強がおろそかになってしまったからです。2 年生を終える頃には、留年すれすれの成績となってしまっていました。

結局人間というのは単純で、授業に出ても一旦分からなくなると、どんどん勉強がつらくなっていってしまうものです。元々は生き物が好きで生物学、自然科学に興味を持って純粋に勉強が面白い、と感じていたのですが、付いて行けなくなると途端にその心を失ってしまいます。

そのまま惰性で 3 年生まで過ごし、4 年生になる頃には取り残した単位が山積みの状態でした。まともに入れて貰える研究室もない中で、唯一受けいれてくれたのが牧岡先生でした。4 年生では取り残した単位の授業に出ながら、卒業研究も行い、就職活動もして、合間にはアルバイトもするというとてつもなく追い込まれた状況になっていました。
16 年経った今でもまだ当時の苦しい状況が夢に出てきます。就職は決まったものの、卒業は出来なかった、という夢です（笑）

ただ、そんな中でも卒業研究は面白く、研究室の先輩らにとてつもなく迷惑を掛けながら行った実験は良い思い出であり、仮説を立ててそれに結びつくよう実験を組み立てたプロセスは、その後の仕事においても役立っていると思います。

そんな中で就職活動を行い、当時既にバブルが終焉し就職氷河期に突入していた最中、20～30 社の面接を受け、今勤務している会社の前身である、協和発酵工業に内定を出して貰いました。

実は内定枠はご存知製薬会社の「MR」枠での入社だったのですが、私としては MR 以外の仕事がしたいと思ってこの会社を受けていました。当時の協和発酵工業は、医薬品以外にも食品、酒類、バイオケミカル事業等、多岐に渡った事業を展開しており、自分としては医薬品以外の事をやってみたい、と漠然に考えていたからです。

会社に入ってから早速その旨を（MR 以外の仕事がしたいという事）を人事担当者に伝えると、意外とあっさりその希望は受けいれられて、私は当時の「バイオケミカル事業部」に配属される事になりました。

バイオケミカル事業は「アミノ酸」を中心に製造販売している事業であり、2008 年キリンホールディングスによる協和発酵工業買収時に分社化し、今日の「協和発酵バイオ」となりました。

私がそこでする事になったのは、アミノ酸やその他の発酵産物を、国内外の医薬、食品、化粧品、工業用と様々な業界に販売する営業の仕事でした。顧客が我々の製品を原料に用いて商品を開発し、販売する事で成り立っているビジネスです。
いわゆる B to B のビジネスで、入社当時から何十、何百という会社に出入りし、アミノ酸等の原料を使って顧客が商品を開発する手助けをする、という仕事をしてきました。自分が携わった商品が世に出たり、その原料の売り上げが上がるというのは、とても心地良いものです。

営業と言っても化学品会社の営業ですから、当然科学的な知識も必要ですし、大学で学んだ事の多くを生かす事が出来ました。クライアント先の研究開発担当者と話す機会も多くありますが、生物学類で学んだ知識が役に立ちました。

その後、2006 年からは 3 年間は、アメリカに駐在する事もできました。当時の自分は TOEIC も 500 点台前半と、全くもって海外で仕事ができるレベルではなかったのですが、アメリカで仕事をしながら英語を覚え、夜中も現地の TV やラジオを付けっぱなしにして耳を慣らしながら、何とか海外オフィスの人達や顧客との仕事もこなせるようになりました。

海外での仕事というのは、大体が文系の人間で、大学から英語を専門に勉強してきた人間が多い、とお思いかも知れませんが実際そんな事はありません。化学品系の会社では多くの理系出身者、生物科学出身者も海外の仕事をしています。特に科学の話は世界共通語です。片言の科学者の話す英語でも、科学者同士であれば理解されたりするものです。私は科学者ではありませんが、それでも大学で落ちこぼれながら学んだ知識は、海外の研究開発者と話す際には役立っています。

2009 年に日本に帰ってきてからも、海外関係の仕事をしておりますが、今では海外の人達と仕事をするのがとても楽しみな自分がいるのを感じます。良く世間で今の日本は「閉塞感が漂っている」と言われますが、実際その通りだと思います。
仕事柄アメリカ、中国、インド、東南アジア、ヨーロッパと多くの国に行きますが、その度に各地の活気を感じる事が出来ます。また、日本人が持たない価値観の中で仕事をする事は、良い意味で自分への刺激になりますし、それを会社に持ち込む事で日本では気付かない新たな価値の創出に繋がると考えています。別に海

外で仕事をしたら偉い、とは思いませんが、より多くの価値観やアイデアに触れる事が出来るのは確かだと思います。

今後どんどん日本と世界の垣根がなくなっていく中で、会社でも研究者の世界においても、ますます英語は重要になってくると思います。アメリカで苦労した私からは、是非皆さんにも今から英語を学んで欲しいと思います。とは言っても、実際「使える」英語というのは日本にいてはなかなか身に付くものではありません。

よって最後に私からは、とっておきの英語勉強法をお伝えします。それは「アメリカの映画やドラマ、ドキュメンタリーのDVD」を何度も見ることです。DVDの素晴らしい所は、「英語」の字幕が見られる事です。まずは「英語字幕」でDVDを見て、読みながら英語を聴きます。聞き取れるようになったら少しずつ字幕無しで見るようにします。多少分からなくても何度も観て聞いている内に必ず聞き取れるようになりますし、会話の中で有効なフレーズや、英語を話す人達の「真意」を理解する事ができるようになります。一般的なドラマを観る事では「感情のこもった会話」を身につける事が出来ます。

自然科学に興味がある皆さんでしらた、「Discovery Channel」や「National Geographic」等を観てもいいでしょう。とにかく、面白いと思わなければ耳には入ってきませんので、自分の興味のある分野のDVDを見れば良いと思います。

偉そうな事を申し上げましたが、所詮は元落ちこぼれの学生の話ですので、皆さんなら既にやっている事かもしれませんね。少し落ちぶれていると思われる学生の方々は、今からでも絶対に遅くないと思いますので私の話から勇気付けられて、頑張って生物学と英語の勉強を再開するきっかけになれば幸いです。

Communicated by Fumiaki Maruo, Received January 16, 2013.